

しえいくはんず

2011. 3
No.34

「配偶者暴力防止及び被害者支援基本計画」策定記念号

しえいくはんずは、男性も女性も慣行や慣習にとらわれることなく、自分らしくいきいきと生きられるよう応援している通信です。

配偶者からの暴力のない社会に向けて ～わたしたちにできること～

パープルリボン・プロジェクトとは

配偶者等からの暴力や虐待など個人の間に
ある暴力をなくし、暴力の問題について知
り、関心を持って一人ひとりが行動できる
キャンペーンです。紫色のリボンを身につけ
てください。「暴力のない世界にしたい」と
いう意思表示になります。

Purple Ribbon

パープルリボン・プロジェクト in ちょうふ

平成 22 年 11 月 12 日(金)～12 月 24 日(金)

「調布市配偶者暴力防止及び被害者支援基本計画」の策定を記念して実施しました。

平成 23 年 2 月 26 日(土)・27 日(日)

輝きフェスタ実行委員会企画により、「心に響かせるDV根絶パネル展」とともに実施しました。

CONTENTS



TOPICS

- ◆ 配偶者からの暴力のない社会に向けて～わたしたちにできること～
P 2・3 調布市の「配偶者からの暴力の防止への取組」について
- ◆ 配偶者暴力防止及び被害者支援基本計画策定講演会
P 4・5 Part I 倉田真由美さん「『だめんず・うぉーかー』を描き続けて」
P 6・7 Part II 信田さよ子さん「夫婦や親子はなぜ『こじれる』のか」

INFORMATION

- P 8 相談事業のご案内
コラム 男女共同参画推進センターの相談室



心に響かせるDV根絶パネル展

配偶者からの暴力のない社会に向けて

TOPICS

～わたしたちにできること～

「配偶者からの暴力」は遠い存在だと思いませんか。しかし、本当にそうなのでしょうか。あなたは身近な人のSOSに気づくことができますか。そのときあなたには何ができますか。暴力のない社会に向けてできることを一緒に考えてみませんか。



●配偶者からの暴力とは？

夫婦間やパートナーなど親密な関係にある人々の間に起こる暴力のことです。「暴力」は、「殴る」「蹴る」だけではありません。電話やメールを細かくチェックする、大切なものをわざと壊す等の「精神的暴力」や、避妊に協力しない等の「性的暴力」、生活費を渡さない等の「経済的暴力」も含まれます。

加害者はさまざまな暴力を行使し、相手を怖がらせ、傷つけることで自分の思い通りに相手を支配します。暴力はどんな関係にあっても許されるものではなく、配偶者からの暴力は犯罪となる行為を含む重大な人権侵害です。

身体的暴力

殴る・蹴る・髪を引っっぱる・突き飛ばすなど

精神的暴力

大声で怒鳴る・何を言っても無視する・交友関係を監視するなど

経済的暴力

生活費を渡さない・家計を厳しく管理するなど

性的暴力

性行為を強要する・見たくないのにポルノビデオを見せるなど

暴力の形態

●なぜ起こる？

憲法には、人は性別によって差別されないと明記されていますが、今の世の中でも、戦前からの男尊女卑の考え方が消えたわけではなく、女性へのさまざまな暴力もなくなっていません。

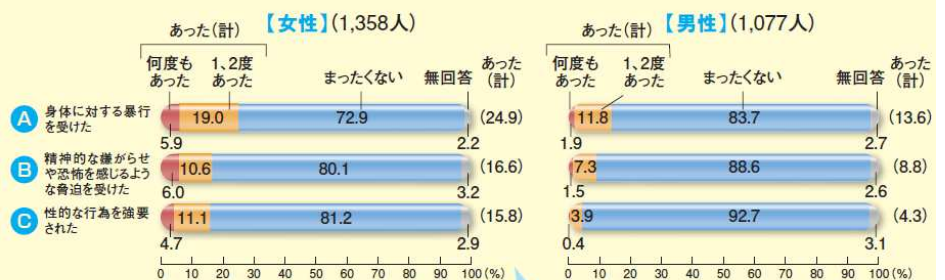
また、1960年代からの高度経済成長期に効率を優先するしくみとして「男は仕事、女は家庭」と性別によって役割を分けるやり方が浸透しました。その結果、男女の収入に格差が生じるようになり、夫が妻に暴力を振るうのは、家庭内のもめごととして軽視される傾向にありました。暴力の背景に社会のしくみから生じるさまざまな問題があることがうかがえます。

●女性の10人に1人が被害を何度も受けている！！

内閣府男女共同参画局公表（平成21年3月）の「男女間における暴力に関する調査報告書」によると、女性の4人に1人が配偶者から身体に対する暴行を受けています。

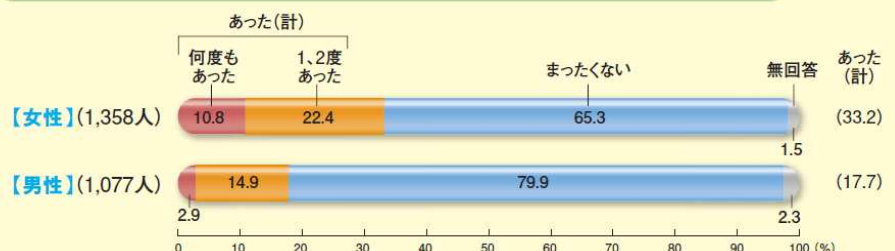
また、調査対象の10.8%にあたる女性が配偶者から身体的暴行・心理的攻撃・性的強要のいずれかを何度も受けたことがあります。さらに、これらいずれかの暴力を一度でも受けたことのある女性の割合は33.2%となっています。

●配偶者からの被害経験



女性の約4人に1人が身体的暴行を受けている

●配偶者からA、B、Cのいずれかの行為を1つでも受けたことがある



女性の約10人に1人が配偶者からの被害を何度も受けている

●子どもへの影響

配偶者からの暴力は男女の当事者間だけの問題と捉えがちですが、配偶者暴力の影響は家族全体に及びます。中でも暴力加害者・被害者と共に暮らす子どもへの影響は深刻な問題です。

法的には、平成16年に改正された児童虐待防止法で、子どもが配偶者暴力を目撃することについて「児童に著しい心理的外傷を与える」言動であり、「虐待」であると定義されました。全ての配偶者からの暴力と児童虐待は表裏一体といっても過言ではありません。

●一人で悩まないで！

配偶者からの暴力を、自分一人で何とかしよう、家族に迷惑をかける等で悩んでいませんか。あなたや子どもの安全を第一に考え、関係機関に相談しましょう。被害の問題解決の糸口は、家庭問題から社会問題とすることと、第三者である理解者の存在です。誰もが正しく配偶者からの暴力を理解し、犯罪である暴力を見逃さない姿勢が大切です。

▶ 一人で悩まずご相談ください。

▶ 暴力を受けている人から相談を受けたときや暴力に気づいたら

「一緒に考えましょう。みんながあなたを支えます」と伝え、下記の相談窓口にご相談してみるように勧めてください。



▶ 身近なところで相談したいとき		
調布市の窓口		
男女共同参画推進センター	042-443-1213	月～金曜日 8時30分～17時15分 (土日祝日、年末年始を除く)
▶ 配偶者から逃げたい・家から出たいとき		
配偶者暴力相談支援センター		
東京ウィメンズプラザ	03-5467-2455	毎日 9時～21時 (年末年始を除く)
東京都女性相談センター	03-5261-3110	月～金曜日 9時～20時 (祝日、年末年始を除く)
東京都女性相談センター 多摩支所	042-522-4232	月～金曜日 9時～16時 (祝日、年末年始を除く)
▶ 生命の危険を感じる時（夜間・緊急時）		
警察	110番	事件発生時
東京都女性相談センター	03-5261-3911	夜間・休日のみ

調布市の「配偶者からの暴力の防止への取組」について

「調布市配偶者暴力防止及び被害者支援基本計画」を策定しました。

調布市は、配偶者からの暴力防止と被害者支援に関する施策を総合的に推し進めていくために、平成22年8月、「調布市配偶者暴力防止及び被害者支援基本計画」を策定しました。基本計画に掲げた3つの基本目標に則^{のつと}って今後も積極的^{のつと}に取組を進めていきます。

計画の策定を記念し、被害者救済に向けた取組を行っていくことや、配偶者からの暴力の実態を広く市民の皆さんに知っていただくために、講演会を開催しました。

講師には、自らの体験を踏まえて実話をもとに綴った漫画『だめんず・うぉーかー』の著者である倉田真由美さんと、DV被害者などのカウンセリングを担っている原宿カウンセリングセンター所長の信田さよ子さんをお迎えして、被害者、加害者、家族のことなど、DVの実情についてわかりやすくお話していただきました。

※計画の詳細は、調布市ホームページでご覧いただけます。



『だめんず・うぉーかー』を描き続けて

講演会 Part I は、漫画家の倉田真由美さんをお迎えして、平成 22 年 11 月 16 日（土）に行われました。参加された方々は、講師ご自身の経験を踏まえた明快なお話に熱心に耳を傾けました。講演終了後、男性を含めた多くの方からの質問と、講師の思いのこもった応答でDVについての理解がさらに深まりました。

『だめんず・うぉーかー』はこうして生まれた

10 年前に 1 回目の結婚をして、あっという間に破綻したため息子と福岡の実家に戻り、東京に出稼ぎに来るという生活をしていました。昨年再婚して、今の夫との間に二人目の子どもがいます。



大学卒業時、不況で就職活動が全滅したため漫画家デビューしましたが、5 年くらいたって『だめんず・うぉーかー』の連載が始まり、ようやく漫画だけで食べられるようになりました。『だめんず・うぉーかー』は、21、2 歳のころダメ男と付き合ったために負った私の心の傷を昇華しようとして描きました。

付き合ったダメ男は二人。一人目の A さんは病的な潔癖症で虚言癖もありました。私が彼のためにご飯を作っているとシンクが汚れている、ガスレンジが汚れている、油が一滴飛んでいると怒りました。待ち合わせをマージャンですっぽかしておきながら「中国マフィアに拉致されていた」と真顔で言っていました。

二人目の B さんはいわゆる束縛男で、言外に束縛感を匂わして相手をがんじがらめにするタイプでした。例えば、女友だちと旅行に行くと言えるといやな顔をする。毎晩 9 時、10 時に電話をしてきて、私がいないと「何してたんだ」と不機嫌になる。別れるのも大変でした。包丁持って押しかけてきて「別れたいならまず俺を殺せ」と言うのです。

「俺を殺せ」というのは私を殺人犯にすることです。愛情とは違います。私を自分の所有物だと思っていたわけです。私の家具を全て持ち出し、あげくには「慰謝料 20 万を口座に振り込むように」などという FAX を送りつけ、私の親まで電話で脅すようになりました。親からお金を借りて終わりにしました。

『だめんず・うぉーかー』を描いて

母に迷惑をかけ心配かけた自分が許せないし、傷つきま

した。それを昇華しようと思って始めた『だめんず・うぉーかー』は、ダメ男と付き合ってひどい目に遭った人の話を私が直接聞いて描いているライブ感溢れる漫画です。今までに 500 人くらいの女性から話を聞きました。良かったと思うのは自分以外にも男でいやな目に遭った人があるのを知ったことです。読者にも「私だけじゃなかったんですね」とよく言われます。不思議なもので「私だけじゃない、他にも仲間がいる」と思うことで救われました。

聞いた話の中で一番多いのはお金にまつわることです。ケチで大変だった話や結婚詐欺もありますし、お金を貢いで捨てられたという話はよくあります。私自身、夫の会社の資金繰りが足りなくて貸しました。自分の彼女からお金を引っ張らないといけない状態で続くわけはないのです。だから私は謹言として皆さんに伝えていきたい。お金のことは結婚してもずっとついてまわりますし、トラブルが絶えません。配偶者を決める段階で金銭感覚は合致させておくべきです。

DVは考える力を奪う

次に多いのがDVです。DVを受けたという女性に何人も会いましたが、その後DVが治まったという話は 1 件も聞いたことがありません。「俺に手を上げさせるお前が悪い」と思いながら殴っていますから反省しない。だから変わらないというより変われないのです。

女性は現状を維持しないと生きていけないから暴力に晒されても慣れようとします。慣れるために相手の良いところを探して自分を納得させようとします。「彼は殴るんですが、本当は優しい人です」というせりふを何回聞いたことかわかりません。どう優しいかというと暴力の後「ホントごめん、もう二度としない」と泣きながら謝り、冷やしてくれ、おかゆを作ってくれるのだそうです。

暴力を振るわれていた女性が「暴力を振るう、謝る、優しくなる、日常に戻る、また、暴力を振るう……とジェットコースターみたいな中にいるから、早く山が過ぎてほしいと思うようになる。怒りのバロメーターが 100 になると暴力も 100 になる。だから 70 ぐらいで手を出させるようにする。私が彼と付き合って学習したことです」と言っていました。そんなことを学習しないでいいのにと思いました。

いろいろなダメ男を見てきましたが、身体的暴力は死に結びつきますから最もひどいものです。一般の殺人事件では男性が女性を殺すケースが圧倒的に多いですが、夫婦間では暴力に耐えかねた妻が夫を殺すケースも多いのです。そういう最悪の事態にならないためには暴力を振るう人と一緒にならないことです。

ダメ男と言われる人は最初異常に優しいことが多いのですが、優しさは負担にならない程度でないと続かない。また、結婚詐欺の被害女性の会で、その場にいた全員が口を揃えて「第一印象がちよっといやだった」と言っていました。殴る人というのは、羊の皮をかぶっていてもオオカミであることをつい出してしまいます。センサーは第一印象と極端な優しさです。そこで勘を働かせれば見抜けます。

暴力の下から抜け出すために

私は殴られた経験はないですが、束縛男のBさんというときは怖かったです。彼が不機嫌にならないように自分の行動を制約していました。別れを切り出すのも怖いので避けて、彼が事故にあって死なないかな、そうすれば彼も幸せなまま死ぬというようなことを夢想していました。そういう状態でいることは良くない。子どもがいるとか、金銭的に問題があるとか簡単にはいかないことがあったとしても離れた方がいいと心から思います。離れてみると恐怖の下にいない心地よさに気づくと思います。そういう方がいたら1カ月ぐらい離れてみることをお勧めします。

そのためにまず誰かに相談されるといいです。『だめんず・うぉーかー』に書いて」と言ってくる女性は、ある程度暴力に立ち向かっている人たちです。片や自分が殴られていることを他の人に知られないようにすることに一生懸命な女性もいます。人に「幸せそうだね」と言ってもらいたくて張りぼてのお城を作っているとしたら、それで果たして後悔しないのでしょうか。

恐怖の下にいない心地よさというのは本当に素晴らしいものです。暴力という大きなストレスを感じない人生を歩んでほしいと心から思います。ご清聴ありがとうございます。

質問に答えて

Q：いじめられる子は決まっていると言われますが、暴力を受ける女性自身にも原因があるのですか。
倉田：殴られる側やいじめられる側にも原因があるなどと絶対に言うてはいけません。それを言うていたらいじめや暴力はなくならないし、加害者側に大義名分がついてしまいます。それはないということをみんなが共通に強く持っていないといけないと思います。いじめられる子はほんの小さなどうでもいい、あるいはどうしよ

うもない理由でいじめられています。

加害者が言うところの殴る原因と、結果としての暴力や犯罪との間はものすごく乖離しています。例えば、空き巣に入られたときに玄関の鍵をかけていなかったとします。鍵をかけなかったことが悪いですか。

痴漢などでもそうです。ミニスカートををはいている方が悪いと言う人がいます。それは加害者側の理屈でしかありません。私たち女性はミニスカートだろうがなんだろうが着る権利があります。責められるべきことではない。

殴られる人も自分の方が悪いのかもしれないと思うことがあるかもしれない。でも殴られる人は100%悪くないです。殴る方が絶対に悪いです。そこは決して勘違いしないようにしてください。

Q：女性が暴力を受けると自分の人権、プライド、尊厳が虐げられますね。尊厳の回復はどうすればいいでしょうか。

倉田：殴る相手の下にいるときは恐怖の方が先に立ちますし、命を生き延びさせることが第一優先です。尊厳を回復させるというのは相手に対抗するということですから、相手の下にいるときにやりだすと命が危険にさらされます。離れて初めてスタートできると思います。



参加者アンケートから

- 前向きな気持ちになりました。
- パワーをもらい元気になった気がします。
- ご自身の体験を引き合いに出し、話の本筋と絡めてゆく手法に引き込まれました。様々な質問に真剣に即答。しかも返答は的を射抜いていました。すごいです。
- 経験を生かすしかない。子どもにも失敗をおそれず人間関係を経験させることが大切だと実感しました。
- 小・中学生から読める『だめんず・うぉーかー』みたいな本を描いていただけたら良いなと思います。講演活動も中学校くらいからしていただければ、少しは「だめんず」が減るのではないのでしょうか。
- 一人息子がいます。「だめんず」にならないようきちんと育てたいと思いました。(人の痛みがわかるように)
- DV経験者の立場にならないとわからないこともきちんと理解してくれていて嬉しかったです。
- 離婚などいろんな問題をかかえている人がいます。私もそのうちの1人です。今後ぜひ、このような企画を設けて頂きますようお願いいたします。

夫婦や親子はなぜ「こじれる」のか

講演会 Part II は、平成 22 年 11 月 28 日（日）に、原宿カウンセリングセンター所長の信田さよ子さんを講師にお迎えして行われました。家族の現実やDVの現状、DVと虐待の関係についてわかりやすく講演されました。ときおりユーモアをまじえたお話に参加者は聞き入りました。

家族の「羅生門的現実」

家族は、性、生まれ・育ち、習慣、世代が違う人たちが同じ屋根の下で一緒に暮らしています。そのために意見をすり合わせていかなければいけない非常に難しい集団です。しかし、家族がいかに難しいかということは 1980 年代まであまり問題になりませんでした。バブルが崩壊するまでは「お父さんが働いてくれないと、うちは食べていけない」という共通した認識があったために我慢しようということになり、表面化しませんでした。

1990 年前後、世界的に見ればベルリンの壁が崩壊し、共産主義対資本主義という二極対立構造がなくなりました。日本ではバブル崩壊、経済の長期低迷不況に入りました。90 年と 91 年に相次いで大阪と東京で、子どもの虐待防止の市民団体が生まれています。政治経済の一連のできごとと、家族の中の暴力が表面化してきたことは同じ流れの中にあると思っています。

同じ家族であっても、性も育ちも世代も異なる父親と母親と子どもは全く違う風景を見えています。芥川龍之介の小説に『藪の中』があります。これを黒沢明監督が『羅生門』という映画にしてカンヌ映画祭で賞をもらっています。『羅生門』では殺人事件をめぐる登場人物一人ひとりの言うことが全く違うのです。A さんからはこう見え、B さんからはこう見えるというわけですが、それらが全部まことしやかに見えるのです。

このことから私は家族の現状を「羅生門的現実」と呼びたいと思います。夫にしてみれば妻へのしつけ、親からすれば体罰だったものが、それぞれ「DV」「虐待」という暴力として定義することができるようになったのです。受ける側がそう名付けることができるようになったことで、DVや虐待が増えたようにみえるのです。新しく生まれたわけではなく、以前から家族の中で行われていた行為を暴力と再定義するようになったのです。

DVが定義されるようになった背景

では、なぜ暴力という定義が可能になったのでしょうか。1975 年から 5 年ごとに世界女性会議が開かれてきましたが、95 年の北京女性会議で 5 つの主要テーマの一つとして「配偶者および親密な関係にある男から女への暴力（ドメスティックバイオレンス=DV）を根絶する」が満場一致

で採択されました。これがきっかけになり、夫から妻への暴力をDVと呼ぶことが日本でも一気に広まったのです。

日本ではまだまだ女性が圧倒的に不利な立場にいます。あらゆる統計を見ても、日本は経済力に比べて女性の地位が非常に低い国です。市議会議員の数、国会議員の数など、男女平等政策達成度は世界の 47 位です。

DVの根底にあるのは、圧倒的に男女が不平等であることです。女性はすべての点で男性より不利な状況にあり、親は子どもに対して大きな権力を行使しているということ、これらをまとめると家族は権力構造であると言っているでしょう。そう考えながらカウンセリングを実践しています。



「法は家庭に入らず」の意味するものは

家族が共通の目的を失い、「羅生門的現実」の集合体であることが明らかになる一方で、プライバシーの強化が進んでいます。個人情報保護という名のもとに、家族が外の世界から断絶されるということが起こっています。「隣は何をする人ぞ」という状態になっています。また日本の法律では、家庭には法律が入らないことになっています。

古代ギリシャのポリス社会では、市民が形成する家族は自律的であり、自治能力を持っていると考えられ、法は家庭に入らないことになっていました。この考え方は近代にいたるまで引き継がれて、欧米諸国の法律を支えてきました。大きく変化したのは 80 年代初頭のアメリカです。ベトナム戦争後のアメリカの家族においてDVと虐待が増加したため、法が家庭に入ることを認めたのです。妻や子どもの命を守るために、DVと虐待の加害者を逮捕できるようにしました。90 年代に入るとカナダが、97 年には韓国が、妻が告訴しなくても警察官がDVと判断すれば逮捕できるようになりました。妻の告訴によらなければ犯罪にできないというのが今の日本の現状で、内閣府の統計によると被害を受けた妻の 6～7 割は告訴しないのです。

日本のDV防止法は「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」が正式名称です。何かが抜けてい

ます。防止と被害者保護からは、暴力を振った人に対する対策は出てきません。「法は家庭に入らず」ということによって、誰を擁護しているのかが明らかになります。

毎日のように起きているDVや虐待に関する事件を直視して、「法は家庭に入らず」に一部例外を認めて、妻や子どもの生命に危険が及ぶと判断されるときは警察が踏み込める、逮捕できるという条項を作れないものだろうかと思います。そうすれば救える命があるはずです。

DVと虐待はどう繋がっているか

おそらくこの場にも、自分の父親が母親を殴っている幼いころの光景を覚えている方がいると思います。それはいくつになっても鮮明です。トラウマ的な経験ですからね。DVを目撃することは子どもに深い影響を与えますが、特に男の子に対して注意が必要です。父の暴力の根底には「女はこうすべき」、「妻はこうすべき」、「家族はこうあるべき」という価値観が働いています。知らず知らずにこの“べき”という考え方を身につけ、母親が父親に殴られても仕方がないと思ったとたんに、自分の妻に対して父親と同じようなことをやりかねないのです。

DV被害を受けた母親は、自分のことで精いっぱい子どもの面倒を見られず、虐待となって表現されることもあります。私たちが誰かをケアできるのは自分がケアされているからです。ケアされていないとき、子どものケアもできません。ケアされないどころか毎日人間として貶められ、馬鹿にされ、無視され、人間扱いされない生活をしている母親が、唯一の希望を子どもに託してしまうことは、少しも不思議ではありません。悩みを聞いてくれ、心配してくれる娘がいたら、蜘蛛の糸でぐるぐる巻きにするように娘を取り込みます。そして、その娘が自分から離れていこうとするときには、「あんた、私を捨てる気？」と言うようになるわけです。母親にとって共に生きる対象は、夫ではなく、娘になりがちなのです。

DV加害者の更正を目的としたプログラムがあります。その参加者に「妻はどんなことを感じていると思いますか」と質問すると、「妻がどう思っているか、どう感じているかなんて考えたことありませんでした」と答える人がいます。疲れている、イライラしている、さびしいという自分の感情を妻は察するべきと思っても、妻自身がどう思っているかということには関心がない。妻が他者であるなどと考えたこともないのです。妻が他者であると認識することを“他者性を持つ”と言います。



夫婦・親子のキーワードは「羅生門的現実」と権力構造、そして他者性です。最初に申し上げたように家族というのは性も、生まれも、世代も違う何人かの人たちが同じ屋根の下で暮らしています。それだけで大変なことですし、さらにプライバシーを尊重するという理由で外の世界から遮断されています。中で何をしても外には漏れないとなると、しばしば想像もできない力や暴力が行使されることがあります。

そうしたことを防ぐには家族はできるだけ他者性を持つことが大事で、そのためには距離が必要です。心理的な距離というよりも言葉で距離を取る。言葉遣いを丁寧にする。丁寧な言葉遣いだと他人行儀になります。家族はいやでも親密にならざるを得ませんから、安全な家族を作るための最善の方法は他人行儀になることではないかと思います。

夫婦のコミュニケーションが取れていれば親子は何とでもなります。配偶者暴力も虐待も特殊なものではなく、いわゆる普通の家族とも繋がった問題です。家族の基本は夫婦関係なのです。

質問に答えて

Q：親のようになりたくない思いながらもそうになってしまうのはなぜですか。

信田：世代連鎖は運命的なものではありません。否定するにしても肯定するにしても親から学習しています。再学習は可能ですから、十分変えられます。自分がされたことを自覚し、子どもには絶対にしまいと覚悟すれば、親とは違う子育てをしているものです。どんな親だったか、どう育てられてきたかを一度おさらいすることが必要だと思います。

参加者アンケートから

- 家族は「羅生門的現実」の集合体である、という言葉にショックを受けた。今後の指針にしたい。
- DVがなくなる社会にするために個人として何ができるのか考えました。
- 親の関係が子どもに影響を及ぼすという点が一番大きく領けた。暴力は子どもに及ばなくても、精神的な影響ははかり知れません。
- 講師の話す力、話す技術の凄さを感じました。
- 結論よりも話し合う過程が大切ということが印象的でした。
- 共感できるお話が多く、何度も頷きながら聞かせていただきました。
- とても力を得ました。全てその通りだと気づきがたくさんありました。

INFORMATION

男女共同参画推進センター相談室（予約制）をご利用ください。

利用は無料です。秘密は厳守いたします。

予約 ☎ 042-443-1213

女性の生きかた相談 1回50分

木曜日、第2・4金曜日 10時～16時
第1月曜日 14時～19時

自分自身のこと、家庭・職場・地域の人間関係、夫や恋人からの暴力など、さまざまな問題や悩みについて女性の相談員と一緒に考えます。

女性のための法律相談 1回30分

第2・3水曜日 14時～17時
第4水曜日 16時～19時

離婚をはじめ夫婦の問題や親子のこと、女性への暴力、働くことをめぐる様々な悩みや疑問など法律上の問題でお困りのとき、女性弁護士がお応えします。（ご利用は、お1人1つの案件につき1回のみとなります。）

女性のヘルスケア相談 （思春期～更年期） 1回40分

第4火曜日 14時～17時

思春期の急激な変化に伴うからだや性、予想外の妊娠の悩み、出産・不妊などの悩み、また更年期障害や婦人疾患などの相談に助産師がお応えします。

働きたい・働き続けたい 女性のための相談 1回50分

第1金曜日・第3土曜日 10時～13時

生き生きと働きたい、自分らしい働き方を探したいなど、「働く」うえで出合う様々な悩みに女性のキャリアカウンセラーが応えます。

一時保育を ご利用いただけます

相談をご利用の時間に、保育室でお子さんをお預かりいたします。

【対象】1歳以上就学前

【費用】無料

【申込み】相談予約時にお申し出ください。

（相談希望日の1週間前までにご予約ください。）

女性の生きかた相談

男女共同参画 推進センターの 相談室



日々の生活の中で私たちは様々な問題を抱えて生きています。相談室にみえる女性たちは年代も幅広く相談の内容も多様です。夫婦関係の悩みが最も多く、家族関係、対人関係、心の不調、また就職・結婚・出産・子育て・介護など女性のライフサイクル途上での迷いや不安が続きます。

「親に怒りを感じてしまう自分はおかしいのではないか」「夫とうまくいかないのは自分が悪いのだろうか」「仕事をしたいけれど自信がない」「気分が落ち込んで辛い」という声もあります。相談員は、こんな悩みをうかがいながら問題解決の糸口を探すお手伝いをします。

DV防止法が制定された2001年以降、配偶者等からの暴力に関する相談が増えています。

女性が抱える悩みの背景に暴力があることは少なくありません。

こうした問題を考える時に一番大切なポイントは孤立しないことです。



発行／調布市男女共同参画推進センター

〒182-0022 調布市国領町 2-5-15 コクティ 3階

TEL／042-443-1213 FAX／042-443-1212

メール／danjyo@w2.city.chofu.tokyo.jp

ホームページ／<http://chofu-danjyo.jp/>

交通機関／京王線国領駅 北口 徒歩1分

【相談予約受付時間】

月～金曜日（土日祝日、年末年始を除く）

8時30分～17時15分

